

植崎優士 「そして、二人になった」…………… 1

アホ伝説 「人間と右手」…………… 7

五芽すずめ [Floral Death Violation]…………… 11

丸井あいは 「殺人の在り方」…………… 14

そして、ふたり
二人になった。

うえさきゆと
植崎優士

登場人物

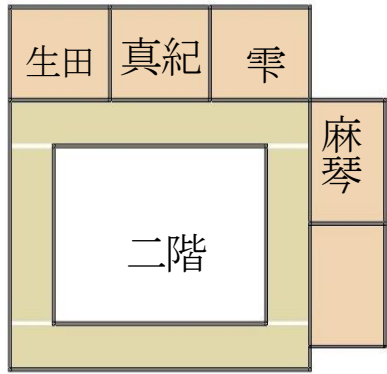
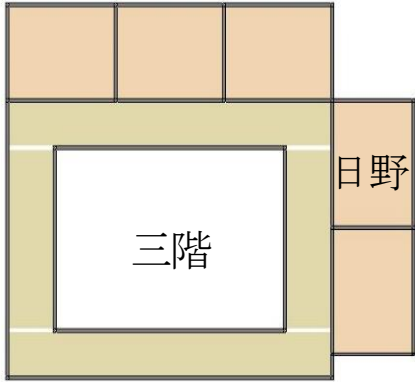
佐藤真紀 英知女子高等学校生徒 研修実行委員

吉野雫 同

姫路麻琴 同

生田智子 同校社会科学教師 文化研修活動責任者

日野真実 同校英語科教師 研修副責任者



「幕間より」

「真紀さん。ご飯の時間ですよ。起きてください」

穏やかに声をかける生田だが、しかし、部屋の中から返事はない。

「船旅に疲れてしまったのかしら。……開けますよ」

一応断りを入れて、生田は各部屋の予備の鍵を束ねたものを用いて扉を開錠し、ゆっくりと押し開けた。もしかして本当に、具合が悪いのかしら……。

「きやう」

扉を開けてすぐに、生田の目の前に何かが降ってきた。思わず声をあげてしまったが、足元に落ちたそれを見て胸をなでおろす。

「――薔薇ね。びっくりさせないでよ」

赤い絨毯の上には真つ白な薔薇が一輪だけ落ちていた。祭壇にある白い百合と同様に、白い薔薇は聖母マリアの純潔を意味し、この教会では礼拝堂の椅子に飾り付けてあるものだ。今日もきれいに飾っており、管理会社はここまでメンテナンスしているのか、と生田は驚いた覚えがあった。

「でも、なんで薔薇がこんなところに？」

訝りつつ生田は室内に視線を転じる。

部屋の調度品ほどの部屋とも変わらず、書き物机、ストूलが二脚、クローゼット、ソファ、ベットがあった。

ただ部屋の中央には、中庭に飾ってあったはずの土に汚れた使徒の像

が円を描くように七つと、黙した彼らが見詰める先で、鮮血に沈むように横たわる真紀の亡骸があった。

—

「では、三日後の昼過ぎに。到着したら教会まで声をかけに行きますので、館内で待っていてください」

船着き場を出る一行の荷物を船から降ろしていた運転手は再び船内に戻っていく。しばらくすると、小型の船は低いエンジン音を響かせながらゆっくりと動き出した。大海に静かな波紋を残しつつ、船はそのまま基督島を離れていった。

「えー！ ここって圏外なの！」

下手なバイオリンのように甲高い声で、吉野隼が不満を漏らした。ちょうど画面を見せて説明していた生田智子は思わず苦笑いを浮かべる。

「少数数でお泊りだなんて、なんだかワクワクするね」

遠ざかる船を見送っている日野真実の背後では、これから過す数日に期待を膨らませている佐藤真紀の、軽やかなソプラノボイスが響いた。

「真紀ちゃん、楽しみなのはいいけど、これはあくまで下見なんだからね。――て言うか、しっかり準備しすぎでしょ！ どうしたらたった三日のお泊りで、大きなスーツケースとポストンバッグの両方を持つてく

るほど荷物が必要になるわけ?」

大きくため息をつきながら、雫は幾多の携帯から目をそらし、真紀の荷物の多さを指摘した。大げさな身振り手振りで、真紀が持つ荷物がいかに大きいかを本人に訴えかけようとしている。それに対して、真紀はセミロングの髪をサツと払ってから、唇にその白く長い指を添え、晴れ渡る空へ視線を飛ばした。

「えっと、下着は三分分と何かあったときのためにもう二日分あるよ。お洋服も同じくらい持ってきたし、タオル類は特に多めに。寒くなったら困っちゃうから、上着もいくつか持ってきて——」

「はいはい! とにかく衣類はしっかり持ってきたのはわかりました!」
真紀の話を見ると、雫はショートヘアを揺らしながら大きくため息をついて首を振った。

「雫さんは荷物が少ないのね。それで準備は足りるのかしら?」

少女二人が騒ぐ中、生田は悠然と笑みを浮かべている。三十歳であるその女教師は、薄らと色の抜けた栗色の髪と黒目の大きな瞳を持ち、それが実年齢よりも若く見えると生徒たちの間で評判の人気教師である。英知女子高等学校はその名の通り女子高で、生徒たちが向ける生田教諭への視線は、もっぱらその美貌に対する羨望のまなざしであった。

「うちは着られれば何でもいいし、これでいいんです」

興味なさそうに答える雫に、

「二人の性格の違いが出るのね。まあ私も、今日は運動靴だけしかないけど。ヒールなんて持ってきても、動きづらだから」

生田は薄く微笑んで言った。

冷静沈着で落ち着いた大人の女性。うら若い少女たちにとってあこがれの存在だ。

「わたしも面倒だから運動靴だけ——つて、ちよつと、あんたどこいくのさ!」

突然、生田の背後を見ながら雫が声を上げた。生田と真紀はその声に釣られるようにして雫の視線を追った。そこには腰ほどまで伸ばした真っ直ぐな黒髪と対照的に、短いスカートを履いた姫路麻琴が林の中に入っついていこうとする場面であった。雫の声を気にする様子もなく、麻琴は歩みを止めない。

「麻琴さん、どこに行かれるのかしら?」

代わりに生田が問うと麻琴は少しだけ振り返って大人っぽい切れ長の瞳を向け、

「お手洗いにいきたいので」

それだけを言い残して先に進もうとする。

「まったく、いつも勝手なんだから」

本日二度目となる大きなため息を吐きながら、雫は真紀の手を取った。「うちらも行くよ。あの子に先を越させてたまるもんですか。早く立派なチャペルを拝みたいんだから!」

そう言っ駆け出す雫に引つ張られるようにして、真紀も一緒に林の中へ入っていく。

「憎まれ口を叩いてしまうのは、麻琴さんの悪い癖ね」

生田はやれやれと首を振る。そして背後で船を見送っている日野を見つけて近寄った。人差し指を立ててゆつくりと肩を叩く。そして日野が振り返ると日野の頬に指が突き刺さった。

「うわっ」

日野が情けない声を上げると楽しそうにけらけらと生田は笑った。

「ぼんやりしていると置いて行っちゃいますからね」

日野が何かを言う前に、生田はバツと肩から手を放して、小走りで生徒三人の後を追っていった。

「——生田先生も人が悪いなあ」

眉をひそめて頬をさすっていた日野は、慌てて女四人の後を追った。

一一

「——やっと追いついたね」

結局全員でまとまって、船着場から林の中にある小道に行くことになったか。

都会では決して味わうことのできない澄んだ空気がこの島に満ちていることに、森へ入ってすぐに私は気が付いた。道中は種類のよくわからない、つまり東京のビル群では見ることがない色鮮やかな野花が、木の根元や遠くに見える草原に群生している。——と思えば、注意深く見る

と、そこ中に白く輝かしい百合の花が咲いていることもわかった。人工的に整えられた花壇のような庭ではなく、力強く野に咲く自然の象徴だ。

そうして地面を眺めながら歩いていると、初めて聞くような美しい鳥のさえずりが頭上から聞こえてくる。踏み鳴らされた地面に降り注ぐまだらな木漏れ日に向けていた視線を上へと転じると、木々の間から燦々とまぶしい太陽の輝きが目に飛び込み、木の枝には毛並みの綺麗な鳥が数羽じやれているのが見えた。

基督島は我らが英知女子高等学校の所有している島であり、そして歴史ある教会が建てられている島だ。なんでも隠れキリシタンとしてひそかに活動を続けていた創設者の家系が、明治になってすぐに海外の伝道局の力を借りて設けられたのが東京は四谷にある校舎で、それより早いか同じかという具合で創設者一族が私有地としていたこの島に教会を建てたというところらしい。

そうした貴重な文化財産ではあるものの、今は教会の管理は管理会社に任せてほったらかしに近い。だから、これから行く教会の様子を想像すると若干の不安が心にちらつく。

今回、私達がここを訪れるようになった理由はこのあたりにある。

貴重かつありがたい建造物がせっかく学校の所有物としてあるのだから、生徒たちの宗教観、また文化的感性の刺激として活用しようではないかという提案により、理事長がぐいぐいと押し上げたのが『文化研修活動企画』である。生徒たちに基督島で宿泊させて、隠れキリシタンとして

潜伏していた時期からの貴重な文献や芸術作品を紐解き、理解を深めさせることを目的としているらしい。この研修が実施可能かどうか確かめる意味で、私たちは教師二人、選ばれた生徒三人——実際は希望者一人、教師の強制指名二人の構成だが——でまずは現地調査に来たのだ。「日本史の追試の代わりってことで連れてこられたけど、実際に来てみるとなんだかわくわくしてきちゃったなあ」

私がぼうっと考えながら歩いていると、あたりをきよるきよると見回しながら、雫がそうつぶやいた。

「ふふ、でしょうか？ そうやって楽しみながらキリスト教徒我が国の文化を学ぼうというのが今回の研修の目的なんだから、それで正解なのよ」
生田先生は嬉しそうに、後方にいる雫のほうを向きながらうんうんとうなずいている。

「だけどね、遊んではかりいるのもだめだからね。ちゃんと、帰ったらレポートを書いてもらうから」

「うげえ！」

生田先生の注意に、雫はカエルがつぶれたような声を上げた。

そのやり取りを隣でおとなしく見ていた私だったが、唐突に後ろから服を引っ張られて危うく転びそうになった。何とかこらえて後ろを向くと、真紀が表情を作らずにこちらを見ていた。視線を落とすと、どうやら今の犯人は彼女であることがうかがえる。何やら秘密めいた空気をを出していたので、察した私は歩調を緩めながら周りと適度に距離をとった。真紀はサツとしゃがみこむ。

「どうしたの？」

軽く微笑みながら私が訪ねると、

「今日ご飯の後に、お部屋に行ってもいい？」

真紀はいたずらっぽい笑みを浮かべながら、甘えたような上目遣いで見上げてきた。

「えっ——さすがに今日はまずいんじゃない？ 誰かに見られてもしたら大変だよ」

私は真紀のわがままに苦笑しながら、我慢しなさいと頭をなでた。

「でも、こんなチャンスは滅多にないし……。わたしの家が厳しいのは知っているでしょ？ お泊りだって写真送らなきゃだめだし。折角こうして、みんなでお泊りっていう口実ができたのに、それを利用しない手はないと思うんだけど」

真紀が意外と大胆な性格だということを知っているのは、きっとこのメンバーの中でも私だけだろう。彼女は自ら研修委員を立候補したことからわかるように、友達の間では真面目な優等生でありつつ、おっとりフワフワした空気を持つ女の子として通っているはずだ。そんな彼女でも、両親の過保護にうんざりしていること——今回の鞆の大きき原因は、両親によるものだろう——そのストレスから時々悪いことをしていることは、彼女に近い友人でも知らないはずだ。私との付き合いが始まってからはそれもすっかり鳴りを潜めたが、実はわがままなお嬢様であるのに変わりない。それを自分ひとりだけが知っているという優越感、私にとって、なんだかくすぐったいようで喜ばしいことでもあつ

た。彼女も、秘密を分け合う存在というものに幸福を感じているようであつたし、何より彼女の鬱屈とした心が爆発するのを止める意味でも非常に重要なことでもあつた。つまり、私たちはともに、特別な何かを手に入れたような気持ちになつて、精神の安寧を得ているというわけだ。

「……こつそり、ばれないように。それができるならいいよ」

私が仕方なしといった具合でうなずくと、真紀はその大きな瞳に太陽の煌きを反射させ、血色の良い唇をいっばいに開くと真つ白な歯を一杯私に見せつけてくれた。月並みな言葉だが、まるでひまわりのように輝かしい笑顔だ。

「ほんと？　ほんとにいいの？」

「こらこら、みんなに聞こえちゃうから静かにしなさい」

興奮しきつて服を激しく引つ張る真紀が愛おしいと思うのと同時に、その声の大きさに危機感を覚えた私はあたふたと彼女を押しとどめたとすると案の定、

「二人とも何してんの？　置いていっちゃようよ」

雫が振り返つて、こちらに声をかけていた。

「ごめんねえ。荷物が重くつて疲れちゃつたあ」

真紀は咄嗟に言うと、えへへと頭を掻く真似をする。雫はそんな彼女の姿にあきれたような表情を浮かべて、

「だから言ったのに！」

まるで真紀の母親のように前を向いて先へと進んでいった。

「危なかった……変に思われるところだった」

いやな汗をかきつつ私のため息交じりに言うと、真紀はごめんごめんと立ち上がる——と、急に肩に手をかけて背伸びをし、私の耳元に可愛らしい小さな唇を寄せてつぶやきを放つと、颯爽と駆け出しで行つた。

「大好きだよ。ま、こ、と」

(続きは本編にて)

人間と右手

でんせつ
アホ伝説

ガチャ。

開くはずのない玄関が開く音がする。

その音が影月の意識に混ざろうとしてくるが、影月は意に介さず、ベッドに寝そべったままでいた。

「おはよう、影月。相変わらず引き籠ってるのね」

そう言いながら、理緒は断りもなく影月の部屋に入ってきた。

影月と呼ばれた青年はジロリと突然の来訪者を一瞥した後、また天井に視界を戻した。

「鍵はどうした。理緒」

「なによその不機嫌そうな声は。椿さんから合鍵を貰ってるわよ。あんたが相変わらず引き籠ってるから面倒見てくれたって」

理緒は持っていたビニル袋から、アイスやヨーグルトの類を取り出すと、入り口の横に置かれた冷蔵庫に慣れた手つきで入れ始めた。

影月は体を横にして、理緒の背中を見る。

すらりと伸びた細長い手足に、腰まで届く艶の良い銀髪。体のラインに沿ったベージュのストリートパンツと白いブラウスがどこか涼しげに感じた。

「お前だって大学はどうした？ 新潟に行っていたはずだろう」

「今は夏休みよ。誰かさんが一緒に大学に進学してくれなかったから、こうして会いに来てるんじゃない」

そう言いながら理緒は影月を振り返った。理緒は目つきが鋭いので笑っていないと怒っているように見える。まあ、今は実際に怒っているのだろうか……。

影月は右手の腕時計に目をやる。日付は9月もなかば。大学生は9月も休みなのかとどうでもい情報反芻しながら、影月はゆっくりと上体を起こした。

「なあ理緒」

「なによ？」

「お前、俺が誰かわかるか？」

「はあ？」

正しくは俺が誰か認識できるか……だけだな。そんなことを影月は考えながら耳だけ理緒に傾けていた。

「何言ってるのよ。上雷影月（あがらいかげつ）、19歳。私の高校の同級生で今は引き籠りのニート、でしょ？」

理緒は最後のでしょをやや強調した。

「最近この辺で、変な失踪事件流行ってるわよね。ある日突然学校や職場から人が消えて、にも関わらず数日経つまで誰もそのことに気付かなかったんだって。家族がいなくなっても気付かないなんて、よっぽどよね。それが何件も起こってるなんて」

「知ってる。でももう誰もいなくならないし、誰からも忘れられたりしないよ」

「やっぱり何か知ってるんだ。あなたたち絡みだと思つたのよ」

そういいながら、理緒はペタンとフローリングの床にお尻をつけ、三角座りしたまま丸まって、買ってきたヨーグルトの蓋を開ける。冷蔵庫への封入作業は完了したらしい。

「……それ食ったら出かけるぞ」

「何処へ？」

影月はのっそりと起き上がる。

「桜のところだ。仕事の報告に行く」

三日前

「影月。魔封機構（まほうききこう）から依頼だ。エンブリオを始末しろ」

影月のスマートフォンから女性の声が拡散される。

声の主は白風桜。魔術師である。

「なんで俺なんだ？」

「どうせ暇だろ？ そう怒るな。舞夜の刀があればいくらでも対応が効くというのが上の連中の思惑らしい……上も何度も討伐隊を出したらしいが、ことごとく失敗してな。未だに誰一人、生きているのに帰ってこないらしい」

「なんだそれは？」

「実際には私にそう言ってきたんだ。詳細は聞くな。私もわからん」

雑な奴——影月は心の中で毒づいた。

「そいつ、殺していいのか？」

「勿論だ。可能であれば討伐隊の救助も言っていたが、それは無視して構わん。開登（かいと）の調査だとその辺にいろらしいが」

「顔を見ればわかるよ。多分そいつは俺と同類だ。じゃあ切るぞ」

通話を切り、スマホをポケットに戻す。

影月が来ていたのは直江津港の海に面したコンテナターミナル。平日の昼間だというのに、辺りには人の気配がない。

（人払いの結界……）

影月は腰に差した刀……『影霊（えいれい）』を抜いた。

海を背に漁港を見渡す。スクラップ置き場や石油ターミナルが立ち並ぶ。

そこに場違いに浮かぶエンブリオを目視する。

高校生くらいの華奢な体。長い栗色の髪。細い目。不敵な笑み。エンブリオは三メートルほどの高さぶ。に浮かび影月を見下ろしていた。

「エンブリオ。意外と早く会えたな」

「僕は君なんて知らないけど、何か用かい？」

「俺たちみたいなのが会ったんだ。やることは一つだろ」

影月は『影霊』の切先をエンブリオに向ける。

「機構の差し金かい？ そんなに姉さんを困らせたい？」

「姉さん？」

「まあどうでもいい。君は、僕が始末するよ」

エンブリオが右手の指を鳴らす。

辺りの物陰や建物、海の中から無数の人間がわらわらと飛び出し影月

を囲んでいく。

影月は刀を下段に構えながら目を左右に振り警戒する。

（こいつら……機構の）

三十人ほどいる、魔封機構のエージェント魔術師。それもどこか生氣の抜けた目をしていて。

「やれ」

エンブリオが冷たく言い放つと同時に、傀儡たちが一斉に影月に集る。

金属音が鳴り、爆炎があがる。エージェントたちの魔術と武器が影月を襲う。

影月の立っていたはずの場所は黒煙と炎に塗れ何も見えない。

「呆気なかったね。ついでに彼も手駒にするか」

そう言いながら、ゆつくりとエンブリオは降下しアスファルトに足を付ける。

爆心地に近づきながらエンブリオが手を少し上げると、呼応して傀儡たちの動きが凍結する。

そのまま黒煙に向けてエンブリオが前に右手を伸ばすのと同時に、黒煙の中から影月が疾走した。

「なっ！」

数メートルはあった距離が数歩でゼロになる獣じみた跳躍。

エンブリオは咄嗟に影月の右腕を掴む。首筋に『影霊』の冷たさが走る。もし右手を前に出していなかったら反応が遅れ、確実に首が飛んでいた。エンブリオの汗が顎を伝って滴り落ちる。

「なんで生きて……！」

「さあな」

影月は不敵に口元を歪ませる。

瞬間、影月の後ろから傀儡たちが炎を巻き起こす。

影月はエンブリオを蹴り飛ばし、振り向きざまに炎を薙ぎ払う。

斬られた炎はそのまま真つ二つになり、影月をアーチのようにすり抜け消えていく。

エンブリオは距離を取りつつもその様子を冷静に観察していた。

「あの刀、炎が切れるのか……なら」

エンブリオが指を鳴らす。エンブリオの背後から三人の傀儡が飛び出し、両手を伸ばす。瞬間、影月の体が硬直し、動かなくなる。

その隙について影月の後ろから、傀儡が何十人も飛びかかる。が、

「死ね」

影月の目が薄青く光る。瞬間、超能力で影月を抑え込んでいた三人の首が跳ねあがった。

拘束から放たれた影月は振り向き、敵陣に向かって跳躍する。

「雷刃流、月下の舞」

弧を描きながら傀儡の群れを突き抜ける。

突き抜けざまに切り裂かれた傀儡たちは、バラバラの人形と化し、アスファルトに潰れていった。

エンブリオは影月を見た。影月は着地すると同時に、刀を鞘に納めエンブリオの方を向き、目をつぶっていた。

「なんで目を閉じてる？ 余裕か？」

「さあな」

影月は斬撃を概念に変えて目から飛ばすことが出来る。その際に視力を魔力に変換するので、回復するまで目が見えなくなる。

「だがお前の位置は音や魔力の揺らぎでわかる。次で終わらせてやる」

「君に次なんてないよ。もう触ったからね」

「なに？」

エンブリオは自身の右手を見ながら言った。

「上雷影月……年の離れた姉がいるね。君に指示を出している人はこの白風桜っていう人？ へー、日向詩音ってあの最強の魔術師だよね？ 君の知り合いなんだ。なかなか面白い人間関係だね。友達は少ないみたいだけど」

「……」

「なんでって顔しているね。君のことならなんでもわかるよ。誰を殺されたら一番悲しい？ やっぱり肉親の上雷椿？」

シニカルに笑うエンブリオとは対照的に、影月は無表情を貫いていた。

「挑発にはのらないか……君を焚きつけるなら誰がいいかな……あ、この子なんかいいんじゃないかな」

エンブリオは右手の平を影月に向ける。影月には見えていないが、淡く黄色い光が手のひらを覆うように揺らめいている。

「この五十嵐理緒って子、試しに殺しちゃうね」

その光の中に、鏡のように五十嵐理緒が映り込んでいた。

瞬間、影月は見えない目を見開きながら駆け出した。左手の親指で鏢を押し上げ、右手で一気に引き抜く抜刀術。

「ハハハハハハ！」

エンブリオは乾いた笑いを上げながら空へと飛びあがり刀を躲す。

「そんなにその子が大事か！ 守りたかったら僕を追いかけてきなよ！」

エンブリオそのまま町の方へと向かって飛んで行く。

「逃がすか」

影月もコンテナの上を飛び渡りながら追いかけます。

（そうだ。そのままついてこい。僕も君を見逃すつもりはない……）

エンブリオは笑っていた。

（続きは本編にて）

いつが
五芽すずめ

嘆きのマザーから白い卵が産み落とされた時、子ども達は誰もがまた不造形の人が生まれるものだと思っていました。庭において美しい者以外は必要なく、嘆きのマザーそして背徳のマザーから生まれた子どもはすぐに打ち殺されていきました。庭にいる子ども達はその他のマザーから生まれた者ばかりで、唯一の例外はこの私だけでした。ある日差し強い朝に背徳のマザーから生まれた私は、かろうじて彼女らの審眼にかなう見目をしていました。それでも私は彼女らに比べて実に醜い顔をしており、その扱いはほんの気まぐれで生き永らえさせてもらっているだけであり、子ども達の交わりに加わることは決して叶わず、いつも背徳のマザーの暖かな木目に背中を預けて一人泣いていました。私は私の姉が以前殺されたことを知っており、私の弟妹が目の前で殺されるのを見てきました。

加えて私は嘆きのマザーから生まれた子どももすぐに殺される様を何度も見ていました。それゆえその時嘆きのマザーが卵を産み落としたと聞いても、そこから新たな命が出てくる瞬間をものはや見ようとはせず、群がる美しい子ども達を遠巻きに、冷めた視線で眺めていました。しかし子ども達の中からざわめきがかかるのを聞いて、私は何か、鋭利な刃物で心臓を突き刺されたような気がしました。美しい。

彼ら彼女らが口々に唱えているのが、私の耳にも聞こえてきました。私はその光景が信じられなくて、もしやこれは白昼の夢なのではないか、うつろな足取りでその一群に混ざっていました。

白い卵が二つに割れていました。そしてその中に、純赤のドレスを着た少女が胎児のように丸くなって眠っていました。不思議なことにその少女は、グロテスクな嘆きのマザーから生まれたとは何があっても信じられないくらいに光り輝く美しい容姿をしていたのです。私みたいに泥水をすすりながらも人として生きていけるだけの姿を保っているというわけではなく、それまで庭に生まれたどの子ども達よりも、一際美しい容姿をしていたのです。

まさか、そんな美しい少女を打ち殺そうとする不届き者はいませんでした。たとえ落ちこぼれの不出来なマザーから生まれた子どもでも、美を讀えていれば諸手を挙げて庭に迎え入れられました。この時私は、深い嫉妬を覚えました。同じ落ちこぼれの下等のマザーから生まれた子どもなのに、どうしてその少女だけが美しい容姿をしているのか、不平等でやりきれない心持ちでした。私は殺されてしまうであろう嘆きのマザーの子どもに同情の欠片を知れず有していたのですが、そんなものは途端に瓦礫同然に崩れていきました。

子ども達のざわめきのおさまらぬ中で、少女は薄いまぶたを持ち上げました。見れば見るほど、美しい器をしていました。黄金のようにまばやく細い髪を長く垂らし、そして髪に引けを取らぬほど妖しく光る黄色い瞳がありました。すらりと高い鼻、蕾のような唇、白い肌はきめ細かい

く、世界中の白銀を溶かして塗りたくったようでした。彼女の生まれながらに身にまとっていた赤いドレスは首周りに白い装飾が施され、彼女の持つ気品さというものをいっそう際立たせていました。少しばかり膨らんだ胸は、少女の聖性というものの象徴のようでした。遠くから見ている私は、あまりの美麗さに目が焦げ爛れてしまう気がしました。

誰もが息を呑んで、少女が何か声を発するのを心待ちにしていました。けれども少女は私達のことをばちばちと得心の至らぬそうなまなこで見渡すと、急に立ち上がり駆け出して、嘆きのマザーの後ろにさっと隠れてしまいました。

はは、照れているんだ。

誰かが言いました。

違っわ、皆、食らいつきそうに囲んでいるんから、怖がっているのよ。

別の誰かが言いました。

私は嘆きのマザーから美しい子どもの生まれたことがショックで、くらりと目眩の色を覚え、覚束ない足取りでその場を立ち去りました。子ども達はいつまでもさわさわと騒いでいましたが、もはやその内容を聞き取ることはできませんでした。背徳のマザーのもとに戻る時、自分の醜い見目形のせいで死んでしまいたくなくなりました。

月が空に浮かんだ頃、私は少女の名前がエリーであることを知りました。私のもとに、わざわざそれを報告してきた子どもがいたのです。もちろんそれは、私への当てつけだったでしょう。エリーは相変わらず口を鎖しているそうで、子ども達が彼女に何か問いかけてもこくりと首

を傾げるばかりといいます。私はいつものように背徳のマザーの暖かな木目に寄りかかり、そしてマザーがいるからには私は醜くても幸せである、と彼女あるいは私自身に向けて語りかけていました。

そうしているうちに私は眠りに誘われ、次に目を醒ました時はようやく太陽が昇っていました。そして私は、私の隣で美しいエリーがマザーの根に頭をあずけるようにして眠っているのを認めました。私はどうして私の横でエリーが眠っているのかわからず、混乱しました。エリーを起こしたかったのですが、彼女の美しい顔を見ると、とても畏れ多くてできそうにありませんでした。そして、やはり幾ばくかの嫉妬の念を胸の内に形成していました。眠り姫という単語が、私の頭を横切っていました。

私とエリーのほか、近くに子どもはいませんでした。もしかしたら彼ら彼女らは姿を隠したエリーを探していたかもしれませんが、まさか美しいエリーが自らのマザーでない、なおかつグロテスクな背徳のマザーの所にいるとは思いませんでした。そして嫌われ者のマザーのもとに卵が落とされでもしない限り、近寄る物好きはそうそういませんでした。背徳のマザーはたださえ他のマザーと比べると卵を孵む周期がいちじるしく遅かったのです。しかしこの頃はどのみちすぐに殺されてしまっていたので、むしろ間隔が開いていてよかったのかもしれない。

私は立ち上がることもできず、エリーが目を醒ますのを待ちました。時折不安な瞳で、顔を上に持ち上げました。そうすると、背徳のマザー

が今にも落ちてきそうな星のように私のことを見下ろしていたのです。私はマザーのことを眺めていると、心を落ち着かせることができたのです。

背徳のマザーはみずばらしい姿をしていました。他のマザーが豊かな翠玉や金糸をその肢体にまらせていたのに対し、背徳のマザーの枝に宿る若葉は一枚もなく、廃老したかのように枯れ細っていました。そればかりか背徳のマザーの身体には幾本もの切痕が罰痕のように穿たれ、そしてその隙間からどろどろと黒い色の樹液を絶え間なく流していたのです。

子ども達が背徳のマザーを醜悪であると蔑むのは無理ないことでした。それは、彼女から生まれた私の目を通して、でした……。私はエリーが目醒ますのを恐れもしました。美しいエリーが醜い背徳のマザーのことを、どのように思うか気が気でなかったのです。不惑な私の顔つきに、マザーは枯れた枝を揺らして応えてくるようでした。

それから私は思索しました。どうしてエリーがこのようなところで眠っているのか考えました。はたしてエリーが私に会う目的できたのか、それとも背徳のマザーを訪れたのか。しかし私はエリーについての情報を嘆きのマザーから異常の例外となつて生まれたということしか知らなかったのです、いかんせんろくな推測になりませんでした。

やがてエリーは目を醒ましました。私は見れば見るほど宝石を想起させる黄色の瞳に吸い込まれてしまいそう、エリーを見下ろしたまま岩のように固まってしまいました。エリーはむくりと上体を起こしました。

透き通るような瞳で私のことを見つめ返してきました。私はそれに怖気を覚えて半身を少しばかり後退させました。そしてエリーの瞳の中に醜い私が映っていることに気づき、ひどい自己嫌悪に襲われました。

おはよう。私は、エリー。

エリーは言いました。その美しい顔にふさわしい、琅羅金糸雀のように心地よい耳ざわりの声でした。

あなたの名前は？

……リタ。

ためらいののち、私は答えました。はたして庭の子ども達に私の名前を知っている者が、何人いたことでしょうか。もしかしたら私ははじめて、エリーに自分の名前を教えたのかもしれない。

リタ、リタ、リタ。リタ、リタ、リタ。

(続きは本編にて)

さつじん あ かた 殺人の在り方

まるい
丸井あいは

一章

冬の夜風はいつだつて遮る物のない、わたしの身体を鋭く突き刺すように吹き荒れる。

都会に溢れるまばゆい光は一屈ことのない夢を抱かせ、わたしの目を眩しくさせる。

街の喧騒はわたしを呼び止めることもなく、わたしの心を寂しくさせる。記憶の情景―いくら振り返つても楽しい思い出など見つからなかった。昔のわたしなら家族と共に来ていたであろう近所にあるこの公園も

この日になるまで一度も訪れることはなかった。

「結局、わたしは都会に馴染めなかつたな……」

「へえ、君つて東京出身じゃないんだね」

静謐な月明かりに照らされて―木陰から『名無し』さんが姿を現した。どうやら準備は出来たらしい。

氷のような目がわたしに向けられている―しかし、自然と怖くなかった。

「はい、宮城県です」

「宮城か。そういえば、地震とか平気だった？」

『名無し』さんは柔らかに微笑んだ―凍りついたような目で。

今、『名無し』さんに四年前の地震によつてわたしの父や母、年の離れた弟が死んだことを告げたとしたら。

「それは大変だったね」と、優しい言葉を投げかけてくれるに違いない。でも、心ではなにも思っていないのだろう。

目的以外は心に響かない意志の強さみたいなものがこの人にはある気がした。そうでなければ殺人鬼として生きていくことなど到底不可能だ―わたしならきつと罪の重さに耐えられない。

今夜初めて出逢つた『名無し』さんが少し羨ましくなつた―わたしも一人で生きる強さが欲しかった。

ふと思ひ、わたしは『名無し』さんに質問をした。

「一つだけ聞きたいことがあるんですけど」

「何かな」

「どうして『名無し』さんは、凶器に鋏を使われるんですか？」

わたしの指摘に『名無し』さんは片手に持つていた鋏に目を向けた―美容師が使用する鋏で、腕を動かす度に刃先が月光の光を反射して煌めいている。

「以前にも同じことを聞いた子がいたんだけどね。やっぱり持ち運びが便利だからかな」

『名無し』さんは答えた。

「東京みたいな大都市で殺人を犯すなら、ナイフとかを凶器に使うのは危険なんだよ。でもこの鋏なら職業を美容師だと偽ればそこまで疑われることもない」

「これまで警察の人に疑われたりとかはしていないんですか」

「捜査方法とかも一応理解しているから、今のところはね。でも地元の

ほうがもつと自由に行動できたかもしれないね」

「どうやら『名無し』さんも都会で生きていく上で苦労しているようだった。少しか安心する―この人がわたしと同じ想いを抱いていることに。」

そしてこれで家族の元に行けるということに。

「心の準備はいいかな」

「はい、お願いします」

『名無しさん』はわたしにゆっくりと近づいてくる。

刃先が首元に当たると―少しだけ身構える。

『名無し』さんは優しく微笑んでいる。

最後にわたしは―きれいな鉄の断つ音を聞いた。

二章

誰もがそうかもしれないが、私は病院が苦手だ。

そこには死が漂っている―懸命な手術でも運悪く命を落とす人、老化によって残り少ない命の灯火を消していく人。そして人の意思によって命を失う人。

検死室には二人の人間の姿があった。

一人は検死官―もう一人は二十代半ばの女性の死体である。私は検死官に声をかけた。

「失礼いたします。警視庁から来た白川(しらかわ)と言います。検死結果を伺いに参りました」

「赤城(あかぎ)さんのところの新米か。」「辛島(しんじま)様」

検視官はそう言う―近くに椅子に腰を下ろした。

「検死結果ね、ええとこの被害者の名前は―」

「園田(そのだ)歩美(あゆみ)さん。二十一歳です」

「そうそう、園田歩美だ。死因は見てもわかると思うけど出血死、出血箇所は首筋だね」

私は彼女の首筋を見つめた。確かにぱっくりと割れている―横にまっすぐ。

「……。凶器は何だと思われませんか？」

「おそらく鉄じゃないかな。ナイフや包丁でもここまできれいに横一文字型で切り裂くことは難しいだろうね。それに―」

ひと呼吸をおき、検死官は続けた。

「これで四件目じゃないか。普通に考えて同一犯でしょ。痕跡もちゃんと残っていたんだよね」

「はい……。殺害方法もそうですが、被害者の髪の毛の長さまで切つて、身体を囲むように撒かれた点等を考えると同一犯の可能性が高いです」

「検死した限りだと性的暴行を加えられた痕跡もないし、死に顔はとても穏やかときた。これまでの事件と一致するね」

『「シザーズ」……」

捜査継続中の事件『連続婦女殺人事件』の犯人である。私は気が重くなった。

三章

「検死結果は以上です。赤城警部」

「ありがとうございます。白川さん」

赤城警部は私にお礼を言うと、自分と私の分のコーヒーを淹れてくれた。お湯によつて蒸されたコーヒー豆の香りは、芳醇な香りを漂わせ、一口飲むと感じる深い味わいが私の心を落ち着かせてくれる。

「今回も犯人に繋がる証拠は見つかりませんでしたか」

私はコーヒーを飲む手を止め、手帳を繰る。

「はい。事件は今月一つまり二〇一五年十二月十三日、東京都千代田区日比谷(ひびや)公園で起きました。過去の事件同様に現場は公園です。犯人に繋がる証拠は発見できていません」

「目撃者については」

「……駄目でした。被害者の死亡時刻―その公園には人が寄り付かないらしくて」

「遂に四件目ですか。大変なことになってきましたね」

しかし、その言葉とは裏腹に赤城警部の口元は笑っていた。

「不謹慎ですよ。警部」

「すみません。でも嬉しくなつてしまいました」

「何にですか？」

「このような美しい殺人鬼が現れたことに、ですよ」

高級なスーツに身を包み、二枚目の顔に銀縁の眼鏡をかけた赤城警部

は優しく微笑んでいた。

「白川さんは『津山三十人殺し事件』や『永山則夫連続射殺事件』を、存知ですか」

「いえ……」

「これらの事件は本当に凄惨でした。村の中で村八分にされた恨みで猟銃や、日本刀を使い無作為に三千人もの村人を殺害した『津山三十人殺し事件』。両親や社会の愛情を受けられなかったと感じ、銃で無関係の市民を4人射殺した『永山則夫連続射殺事件』」

赤城警部は嬉々として続ける。

「僕はその時代に暮らしていたわけではありません。しかし捜査資料などを読む限り、日本の歴史の中でも指折りの殺人鬼と言えるでしょう。しかし、僕にとつてそれらの事件は凄惨であるだけです。そこに事件としての美しさはない」

「美しさ……」

「しかし、首筋に一撃という簡潔な殺し方―辺りには女性の命である髪の毛が広がっている。何より―被害者の誰もが安らかな顔で死んでいる。とても美しいとは思いませんか」

赤城警部は再び柔らかに微笑んだ。

「……」

赤城佑樹警部 現在二十五歳と私より三つ年上で、国家公務員採用試験をトップ合格で警視庁に入る。取り扱った事件の未解決率はゼロと、警視庁期待のホープである。

しかし、殺人犯に対しての異常な関心、事件の美しさを尊ぶ刑事としての在り方は彼を孤立させた。

そして遂に―赤城警部の下に配属された刑事たちは私以外を除いて全員別の班へ異動となった。残っている私は単純に出遅れただけである。

「警部は……」

周りの人たちがいなくなる景色を無関心で眺めていた赤城警部は。

身の回りの人が死んだとしても―こんな風に笑うことができるのだろうか？

私が言葉を継げずにいると、何処からか怒号が聞こえてきた。どうやら私たちのほうに近づいてくるらしい。

「赤城！」

私たちの前に現れたのは、大柄で無精ひげを生やした―青木(あおき)―樹(かずき)警部と、部下の緑(みどり)山水樹(やまみずき)刑事だった。

青木警部はいわゆるノンキャリア組、現場の叩き上げの刑事だ。元々赤城警部のようなキャリア組とノンキャリア組の関係は悪いのだが、この二人の仲は最悪と言わざるを得ない。

「どうかしましたか。青木さん」

「どうかしたじゃねえだろ！ 捜査会議サボりやがって！」

赤城警部は基本的に捜査会議には出席しない。それが青木警部をいらつかせている。

「大丈夫ですよ。捜査資料は白川さんに頂きましたので」
そう言いながら私の目を見て微笑む赤城警部。

「捜査会議に出るのは刑事として当然のことだろうが！ 嬢ちゃんもいつを甘やかすんじゃない！」

「すみません」

あまりの勢いに後ずさった私を―警察学校時代の同期である―緑山が受け止めた。

「結局、青木さんはなんの目的でこちらへいらしたのですか。まさか僕を怒りにきただけ、というわけではありませんよね」

「ちっ」

青木警部は怒り足りないようであったが、どうやら話を始めるつもりらしい。

「今回の連続殺人事件―お前らとチームを組んで捜査をしろってよ」

四章

「俺たちは三、四件目の事件について遺族に話を聞いてくる。だから赤城たちは他の二件を担当しろ」

半ば強引に担当を割り振った青木警部はそそくさと部屋を後にした。携帯で地図の確認をする二件目の事件現場である新宿区大久保(おおくぼ)公園の真向かいに被害者の家はあるらしい。

「では行きましょうか。警部」

「僕には行く必要がないと思うんですけどね。話なら白川さんから話を聞けばいいんですから」

赤城警部は事情聴取などの仕事は私や他の部下に任せて自分で動く

ということがほとんどない——運動が苦手というわけではなく、単純に意味がないと考えているらしい。

人と会話によって得られる気づきや感情を不純物として捉えている——青木警部が一番気に入らないのはこの点なのだろう。

だからこそ私はこの言葉を発した。

「青木警部に殴られますよ」

すると赤城警部は意表を突かれたようで、ゆっくりとではあるが外出する準備を始めた。私も身支度を済ませていると緑山から一通のメールが届いていることに気づいた。

内容は今回の共同捜査の挨拶に加え、赤城警部の下にいる私を気遣った文章だった。

赤城警部の元を去る人間が絶たないのは彼が絶大な悪い意味での影響力を持っているからだ——青木警部のように強い信念を持っていない刑事が彼の近くにいと、次第に事件の美しさについて目が向くようになるらしい。そうなれば元には引き返せない。

被害者側に立てない刑事は失格だ。

警察学校の講師がよく言っていた言葉である。だからこそ緑山は私を心配してくれているのだろう。思えば彼には大きな借りがある。

学校時代——私は同期にストーカーのような行動をされていたことがある。その時緑山は、相手と暴力事件を起こしてまで私を守ってくれた。結局——ストーカーをしていた同期は警察学校を辞めさせられたが、緑山は大きな罰則もなくこうして刑事になることができ私は安心した。

「お待たせいたしました」

携帯から顔を上げると、赤城警部は不機嫌そうな顔で立っていた——事情聴取が本場に億劫なようだ。

「では行きましょうか」

私は決してこのような刑事にはならない——そう思った。

(続きは本編にて)